



# すけもりせいじ 祐森誠司さん

東京農大農学部畜産学科教授



1959年京都生まれ。東京農大農学部畜産学科卒。同大学院農学研究科修了。民間の研究所研究員、県立短大講師などを経て、東京農大講師、助教授から教授に。専攻は家畜飼養学。

## 食の安全・安心に貢献を 「畜産」の現場に若い力

東京農大農学部のキャンパスは、神奈川県厚木市内の、緑豊かな丘の上に広がっている。学部再編に伴って世田谷キャンパスから完全移転したのは、2000年（平成12）3月だった。

農学科、畜産学科に加えてバイオセラピー学科が増設され、現在は3学科体制だが、この大学で最も伝統のある学部と言っている。他の多くの大学が畜産学科の名称を生物応用科学科、動物生産科学科などと変更していった中で、今や、畜産の名を残す唯一の学科でもある。

「畜産という言葉には、くさい・きたない・きつい、いわゆる3Kイメージがあった」と、そう語る自らは1982年（昭和57）畜産学科卒。「しかし、今の若い人たちは、むしろ牧歌的な、明るいイメージを抱いているようです。学生の4割は女性になりました。私の時代とは様変わりです」

日本の畜産業は輸入飼料依存に苦しみつつも、経営体質の改善で、3K払拭を急いでいる。安全・安心を求める「食」の要請も強い。生命尊重の理念から「動物福祉」の観点も欠かせなくなった。

かくて、「動物の生命と生産を科学する」。それが現在の畜産学科のキャッチフレーズである。専門の家畜飼養学では、飼料の栄養、飼育環境の調整、排泄物の処理などを研究対象とする。

例えば、豚の飼育について、明るい空間で伸び伸びと過ごさせ、適度の運動をさせたらどうか。肉質改善のための「歩行運動」の試験研究が興味深い。

通常、豚の歩行速度は時速4キロというから、ほぼ人間並みだ。農場内にコースを設定して、後ろから追うと、ついには駆け足になって時速12—15キロ程度に達する。長続きしないのが難点というが、研究論文に添えた豚のイラストがなんともユーモラスではないか。

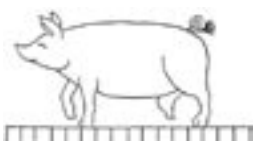
「一定の運動をさせることによって、確かに背脂肪を減らす効果がある。まだ試験途上ですが、しまりのいい肉質を求める要請には応えることができると考えています」

研究・教育の場として、静岡県富士宮市の朝霧高原に「富士農場」がある。約33ヘクタールの用地に、牛50頭、豚100頭、鶏900羽が飼育され、学生たちは研修センターに宿泊して実習を行う。

「知識を詰め込むだけでなく、ぜひ生産現場を実体験するとともにその課題を意識して、応用力を磨いてほしい」

近年、畜産業界では「食の安全」をめぐる不祥事も浮上した。明るい現場を築くために、若い力に大いに期待しよう。

（文・秋岡伸彦、写真・神本洋治）



常歩



速歩



駆歩